ある木曜日

（高校生と保育園の子ども）

斎藤みちよ

「アッ、センセイ、キョウ、モクヨウビダネ、コウコウノオネエサン、クル？」

「マタ、キテクレルカナー？」

磐田の町中にもあちらこちらに白い花をほころばせ、「あら！　こんなところにも梅の木があったのかしら」と、気づかせられるまだまだ寒い早春、木曜日朝のマラソンをかねた散策のひとときー……。この一人の声が大きく広くひろがっていき、「さあ、どうかなー」と、じらす保母に幼い視線が「早くしろ！」と集中する。

第一回目×月×日(木)　若さあふれたお姉さんと遊ぶ。一対一の何でも応じてくれるお姉さんにおなかはすいても満足な一時間。

第二回目×月×日(木)　安全性、色彩、興味そして運動量、知育面共に細心の注意を払い研究、製作、完成されたたくさんの大きな玩具、小さな玩具で遊ぶ。

第三回目×月×日(木)　巻絵式、カード式、紙に、布に、クレヨン画あり、水彩画あり、はり絵ありで、従来の絵本のイメージから脱皮した新しい感覚がいっぱいの作品、何よりも心のこもった暖かみのある絵本で遊ぶ。

家庭科の時間と昼食をさいて来園してくださるとのことで、常時動きまわっている子どもたちにとっては、そろそろおなかの虫が鳴りだすころなのだ。しかし、回を重ねるごとに木曜日の十一時三十分は、心ウキウキさせられる待遠しい一時となってしまったようである。

「アレ、オモシロカッタナー」

「オー、ミンナデ、ハイッタラ、トンネルミタイニ、マックラデサー、ゴッツン、ゴッツンサ」

「オレ、オマジナイシタラ、センスイカンミタイニ、アイタサー」（トンネル遊び）

「タケトンボモ、ヨクトンダネ」
「ウンソーダ、マエーニ、エンチョウカイジュウガツクッテクレタノ、ナンニモトバナカッタケドナー」（エンチョウカイジュウ＝園長）
「カメンライダーモ、カッコヨカッタヨナー」
「アーイウノハ、ヤッパリ、コクブンジガイイヨ」、（常に散歩にいき、サッカー、鬼ごっこ、木のぼり、芝生の上でのさかだち、木の実拾いを経験してきた遠江国分寺跡での遊びを想像したのでしょう）
「センセイ、アノ、ナチストエコー（ナルシスとエコーという題名）ノ、ヌノノホンガステキダッタヨネ。ダイイチ、ヤブケナイモン。ソレニ、オセンタクモデキルモンネ」、（保母の会話を聞きかじったのかな）
「ワタシ、ホントーニビックリシチャッタ。ヌノノホンナンテ、ハジメテミタモン」
お姉さんたちに読んでもらうと、それだけでは満足できず、その本を借りると、一人で、あるいは友だち同志で、また高校生を客として読み合う姿が印象的に思い出されました。
また、どちらかというと自分の殻にとじこもりがちなT君、全長三メートルもあろうか、スポンジとタオルを使用して、ピンク、ブルー、黄色とカラフルなきれいなヘビを、ひっぱったり、汽車にしたり、縄とびにして友だち同志遊んだ後、広い室内の真中でそのヘビを体に巻きつけ、床にもんどりうって倒れ、右に左に身をまかせ、そのクッション、感触を一人楽しんでいる姿が、満足げな顔が思い出されるのでした。
その他、お手玉、ボクシング、木製パズル、列車、パクパク人形、等々。昔ながらの玩具、最近の物と、種類と製作課程に工夫がこらされているのに感心し、驚かされました。特に木製パズルについては、切る、ヤスリかけ、ペーパーかけ、色ぬり、ニス塗りの行程で男生徒の自発的協力があったことを耳にし、幼児には恵まれない年齢で関心が薄いのではなかろうかとの推測に、ゆく末、いく年かには父親になるであろう彼らに拍手を送りたい。
このように思いきった授業形態を実践された高校教育に明るいものをみた感じです。そして、縦割保育ならぬ、大きな縦割的交流の場が、どんどんつくられてもいいのではないかとも思ったものでした。
このように思いもかけぬうれしい訪問をうけ、一番喜んだのはやはり子どもたち。日ごろの地をいく行動派、い

つもとは逆に、無性にはしゃぐ子、とまどう子、さまざまではあっても、しだいに大勢のお姉さんたちに囲まれ、いつかマジックにかけられてしまったようです。初めは玩具や絵本をなかだちとし、しだいに体ごとぶつかっていくと真剣にうけとめ、聞き入れ、答えてくれて、心身の満足があったのでしょう。家庭にあっても存分にそのエネルギーを発散しきれない環境の多い子どもたちにとって、短かい時間ではあっても充実した時間だったのでしょう。

私たち保母は、家庭にも、そうあるべきではないか、と呼びかけなければならないと共に、手作りのおやつ同様、忙しいの一語に片づけることなく、この手作りの玩具のよさ、真の意義を再認識させてくれた思いでした。

受入れ側も種々反省がありましたが、作品を現場におろした時、いかに効果的に幼児に与えるかという点、保育のテクニックを要求するのは望むべきことではありませんが、製作の課程にさまざまな注意を払い完成させた尊い作品がより生きたのではないだろうかとの意見も出されました。

花火大会、合宿、芋ほり遠足、立食パーティー、そしてスケート教室等、楽しい思い出がいっぱいの一ヵ年を、あとわずかでおえようとしている修卒園児達の胸に、直接的には数時間という短いふれあいしかなかったけれど、これら大きな行事に負けず大きなウェイトをしめていつまでも残る事であろうと、ここ遠州の地には珍しく、穏やかで、けむった春の空を、喜々とした子どもたちと共にあおぎ見ながら思うのでした。

（静岡県磐田市
私立こうのとり保育園）

七月号掲載の、〃高校生と保育で、高校生の方々が実習に行かれたのが、この「こうのとり保育園」です。若い高校生と保育園々児のほほえましい風景が目に見えるようです。